

教育実習の改善に向けて

— 英語科実習生の授業意識に関する一考察 (2) —

小橋 雅彦 瀬戸口茂久 山田佳代子 榎葉みつ子

1. はじめに

中央教育審議会(2006)の『今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)』でも述べられているように、「教育課程の質的水準の向上」,「教育実習の改善・充実」は重要な課題となっている。社会の変動に伴い,教員に求められる資質能力が一層高いものとなりつつある今日,教育実習生指導はその更なる改善と充実が求められている。

現職の教員と比べて,教育実習生の授業運営行動には未熟かつ稚拙な点が数多く認められる。これらの多くは教育実習生の経験や技術,知識不足に原因があると考えられるが,教育実習生の「意識」を改善することで,彼らの授業運営行動の改善につながる。これまでの研究において示唆されている(藤沢,1985)。

教育実習生は,これまでの学習者としての経験や,大学の教職課程での講義を通して,言語や言語学習に対して様々なbeliefs(言語や言語の指導・学習に関する思い込み)を身に付けていることが指摘されている(深澤ほか,2011)。英語科実習生が持つ英語学習・英語教育に対するbeliefsを明らかにすることは,今後の英語科教育実習指導を考える上で非常に有益であると考える。

2. 調査

(1) リサーチ・クエスチョン

英語科実習生が持つbeliefsを明らかにし,今後の教育実習指導に活かすため,以下をリサーチ・クエスチョンとして設定した。

- ①英語科実習生がどのようなbeliefsを持っているのか
- ②英語科実習生と現職英語教員との間にbeliefsにおいてどのような差異があるのか
- ③英語科実習生のbeliefsが教育実習を経てどのように変化するのか

(2) 被験者

英語科実習生の被験者は広島大学の3年生27名(男性19名,女性8名),4年生4名(男性1名,女性3名)の計31名。いずれも2011年に広島大学附属中・高等学校で2週間ずつ(4年生は6月,3年生は15名が9月,12名が10月)教育実習を行った(10月の12名は他附属校で事前に2週間教育実習を経験していた)。現職英語教員の被験者は広島大学附属中・高等学校に勤務する9名(男性6名,女性3名)と県内公立高等学校に勤務する女性1名の計10名。いずれも10年以上の現職経験を持っていた。

(3) 質問紙

調査に用いた質問紙には,深澤ほか(2011),Brown(2009)を元に,75の質問項目を用いた(資料1)。回答の方法は,先行研究に従い,5件法(1:まったくそう思わない,2:あまりそう思わない,3:どちらともいえない,4:ややそう思う,5:非常にそう思う)とした。

(4) 手続き

英語科実習生には教育実習前(実習初日)と教育実習後(実習最終日)に質問紙調査を実施した。現職英語教員については教育実習終了数日後に質問紙調査を実施した。それぞれの回答を点数化し,①英語科実習生の回答(教育実習前)で肯定的な値(平均値で4点以上とした),及び否定的な値(平均値で2点以下とした)を示した質問項目を抽出し,英語科実習生のbeliefsの特徴を探った。その後,②英語科実習生(教育実習前)の回答と現職英語教員の回答を質問項目ごとに t 検定を用いて比較し,③英語科実習生の教育実習前・後の回答を質問項目ごとに t 検定を用いて比較して,その結果を分析・考察した。

3. 結 果

(1) 英語科実習生の回答 (教育実習前)

英語科実習生に実習前に実施した質問紙の回答を点数化し、平均値が4点以上であれば質問に対して肯定的に、2点以下であれば否定的に捉えているものと考え、それぞれに当てはまる質問項目を抽出した(表1)。

表1 実習生の回答 [4点以上及び2点以下] (N=31)

質問	Mean	SD	質問	Mean	SD
73	4.65	.49	66	2.00	.86
12	4.61	.50	16	1.94	.81
38	4.48	.63	26	1.81	.87
75	4.45	.68	20	1.71	.69
59	4.39	.62	44	1.55	.72
69	4.39	.62	18	1.52	.68
25	4.35	.66	19	1.52	.77
24	4.29	.82	42	1.32	.48
11	4.13	.67			
60	4.13	.88			
41	4.03	.80			
62	4.00	.63			

平均値が4点以上だったものには、「11. 言語は主として模倣によって学習される」、「12. 英語を学ぶ日本人学習者は、日本語の影響を受けた間違いをおかす」、「24. 教師は複雑な文法規則の前に簡単な文法規則を教えるべきである」、「25. すべての人間に生得的な言語習得能力がある」、「38. 言語の中には、学習するのが簡単なものと難しいものがある」、「41. 英語を話すためには、英語を使う人々の文化を知る必要がある」、「59. よい英語教師は(以下同)生徒の発話上の誤りを、直接的でなく間接的に訂正する」、「60. 言語そのものと同じくらいの知識を、その言語を話す人の文化についても持っている」、「62. 主に特定のタスクを行わせることを通して言語を指導する」、「69. ある文法項目を提示する際に、必ずその構造が実際の場面でどのように使われるかを例示する」、「73. 生徒が理解できるように、話す英語を簡単にしたり、変化させたりする」、「75. 授業で他の生徒から情報を引き出すような活動を用いる」の12項目があった。

平均値が2点以下だったものには、「16. 作文は日本語で書いてから英語に訳させるべきである」、「18. すべての生徒が同じ習得過程をたどって英語の文法を習得する」、「19. すべての単語が聞き取れないとその話者の言いたいことは分からない」、「20. 円滑なコミュニケーションには文法規則の知識があれば十分であ

る」、「26. 生徒の間違いはすべて訂正すべきである」、「42. 正しく言えるようにならないうちに、何か英語で言うべきではない」、「44. 数学または科学が得意な人は、外国語を学ぶのは得意ではない」、「66. よい英語教師は授業の活動においてグループやペアワークをあまり使わない」の8項目があった。

(2) 教育実習生と現職教員の差

英語科実習生と現職英語教員のbeliefsにおける差異を調べるため、教育実習生の回答(教育実習前)と現職教員の回答との平均値の差をt検定を用いて比較した(表2)。

表2 実習生(教育実習前)と教員の比較

質問	実習生(N=31)		教員(N=10)		t	p
	Mean	SD	Mean	SD		
1	3.68	1.08	4.50	.53	2.31	.026
2	3.97	.89	3.10	.32	4.54	.000
8	2.68	1.19	1.80	.63	2.99	.006
12	4.61	.50	4.10	.88	2.33	.025
29	3.45	.85	2.80	.63	2.23	.032
38	4.48	.63	3.90	.88	2.32	.026
57	3.93	.69	2.90	.57	4.26	.000
59	4.39	.62	3.70	.67	2.86	.013
61	3.39	.88	2.70	1.06	2.04	.048
62	4.00	.63	3.20	.63	3.48	.001

5%水準で有意な差が見られたのは、実習生が上記で肯定的な回答を示した質問項目12, 38, 59, 62に加え、「1. 英語を流暢に話せるようになるには、文法の規則を理解する必要がある」、「3. 生徒にとって、どう言うかより何を言うかに焦点を当てるのが大切である」、「8. 生徒同士で、外国語による自由な会話を行なうと、誤りのある英語を使うので、互いの誤りを身につけてしまう」、「29. 外国語学習の開始年齢が低ければ低いほど、それだけ成功の度合いも高い」、「57. よい英語教師は生徒の発話における誤りをすぐに訂正しない」、「61. (同) 生徒の文章を文法的正確さで評価しない」の10項目であり、質問1以外はすべて教育実習生の得点が高かった。

(3) 教育実習前・後の差

英語科実習生のbeliefsが、2週間の教育実習を経てどのように変化するかを調べるため、教育実習初日と、教育実習最終日に実施した質問紙の回答の平均値の差をt検定を用いて比較した(表3)

表3 教育実習前・後の比較

質問	実習前(N=31)		実習後(N=31)		t	p
	Mean	SD	Mean	SD		
11	4.13	.67	3.87	.62	2.79	.009
35	2.94	.93	2.55	.77	2.11	.043
41	4.03	.80	3.71	.82	2.56	.016
42	1.32	.48	1.55	.62	2.24	.032
60	4.13	.88	3.61	1.12	2.33	.027
72	3.81	.87	3.48	.93	2.16	.039

5%水準で有意な差が見られたのは3-(1)で挙げた項目11, 41, 42, 60に加え、「35. 英語を聞く時は文字を見せるべきでない」、「72. よい英語教師は言語や文化の指導においては、教科書よりも実物教材を主に使う」の6項目であり、質問42以外は全て実習前より実習後の方が得点が低かった。

4. 考 察

以上の結果を元に、リサーチ・クエスチョンごとに考察を加えていく。

(1) 英語科実習生がどのようなbeliefsを持っているのか

英語科実習生は質問「11. 言語は主として模倣によって学習される」に高い得点を示しており、英語学習に対してもそのように捉えているものと思われる。質問「12. 英語を学ぶ日本人学習者は、日本語の影響を受けた間違いをおかす」、「38. 言語の中には、学習するのが簡単なものと難しいものがある」の得点が高く、実際に学習者としてそのような経験をしたことで、上記のbeliefsを形成しているものと考えられる。「25. すべての人間に生得的な言語習得能力がある」が高く、「44. 数学または科学が得意な人は、外国語を学ぶのは得意ではない」が低いことから、学力に関係なく英語は誰にでも習得可能な言語であると考えているようである。

英語の授業に関しては、「66. よい英語教師は授業の活動においてグループやペアワークをあまり使わない」の得点が低く、「75. (同) 授業で他の生徒から情報を引き出すような活動を用いる」が高いことから、他者と関わる活動や、ペア、グループワークを重要だと考えていることがわかる。また、「20. 円滑なコミュニケーションには文法規則の知識があれば十分である」、「42. 正しく言えるようにならないうちに、何か英語で言うべきではない」の得点が低く、「62. 主に特定のタスクを行わせることを通して言語を指導す

る」、「69. ある文法項目を提示する際に、必ずその構造が実際の場面でどのように使われるかを例示する」の得点が高いことから、詳細な文法等の学習にこだわるよりも、実際の場面やタスクと結びつけて、英語を使用することで習得させようとするコミュニケーション志向が強いことが伺える。

教師に必要な知識として、「41. 英語を話すためには、英語を使う人々の文化を知る必要がある」、「60. 言語そのものと同じくらいの知識を、その言語を話す人の文化についても持っている」の結果から、文化的な内容を重視していることがわかる。

学習者への対応に関しては、「26. 生徒の間違いはすべて訂正すべきである」の得点が低く、「59. よい英語教師は生徒の発話上の誤りを、直接的でなく間接的に訂正する」が高いことから、生徒の誤りに対して寛容であるべきだという態度が見られ、「24. 教師は複雑な文法規則の前に簡単な文法規則を教えるべきである」、「73. 生徒が理解できるように、話す英語を簡単にしたり、変化させたりする」が高いことから、生徒の習熟度に合わせて柔軟に対応するべきだと考えていることも推測できる。

(2) 英語科実習生と現職英語教員との間にbeliefsにおいてどのような差異があるのか

有意な差が見られた10項目のうち、「1. 英語を流暢にはなせるようになるには、文法の規則を理解する必要がある」においては現職英語教員の方が得点が高く、「3. 生徒にとって、どう言うかより何を言うかに焦点を当てるのが大切である」では英語科実習生の方が高い得点を示していた。これらのことから現職英語教員に比べて、英語科実習生は形式よりも内容を重視していることがわかり、現職教員ほど文法指導を重視していないと考えられる。

「57. よい教師は生徒の発話における誤りをすぐに訂正しない」、「59. (同) 生徒の発話上の誤りを、直接的でなく間接的に訂正する」においては共に英語科実習生の方が得点が高かった。英語科実習生は現職英語教員と比較して、誤りに対してより寛容で、それらを指摘する際も直接的な訂正を避けようとする態度が見てとれる。

「12. 英語を学ぶ日本人学習者は、日本語の影響を受けた間違いをおかす」、「29. 外国語学習の開始年齢が低ければ低いほど、それだけ成功の度合いも高い」、「38. 言語の中には、学習するのが簡単なものと難しいものがある」においては、いずれも英語科実習生が高い得点を示したが、これらは自らの経験や世の通説等から得た情報をもとに形成されたbeliefsを反映し

ていると思われる。現職英語教員は、現場での経験からこれらを否定するような事実を目にしているため、得点が低くなっているのではないかと考える。4-(1)で、ペア、グループワークに対して積極的な姿勢を示していた英語科実習生が、「8. 生徒同士で、外国語による自由な会話を行なうと、誤りのある英語を使うので、互いの誤りを身につけてしまう」において、現職英語教員より高い得点を示している点は興味深い。

(3) 英語科実習生のbeliefsが教育実習を経てどのように変化するのか

教育実習前よりも実習後の方が得点が上昇した項目としては「42. 正しく言えるようにならないうちに、何か英語で言うべきではない」がある。コミュニケーション志向の強かった教育実習生が、教育実習を通して、コミュニケーション活動に至る前に十分な機械的な練習や反復が必要であることに気付いた結果であると考えられる。

「11. 言語は主として模倣によって学習される」は実習後に得点が減少した。TEFL環境の日本においては帰納的な学習だけでなく、演繹的な学習も重要であることに実習を通して気づいたのであろう。

「41. 英語を話すためには、英語を使う人々の文化を知る必要がある」、「60. よい英語教師は言語そのものと同じくらいの知識を、その言語を話す人の文化についても持っている」に関して、実習後に得点が減少していたのは意外であった。実際に教壇に立つと、実習前に考えていたほど文化に関する知識を必要とされる場面がなかったと感じたのかもしれない。

「35. 英語を聞く時は文字を見せるべきでない」、「72. よい英語教師は言語や文化の指導においては、教科書よりも実物教材を主に使う」といった、指導の技術に関する項目も実習後に得点が下がっていた。教育実習生は自らの経験や教職課程で得た情報等を基にこのようなbeliefsを形成していたが、実際に現場に立つことで、指導技術に関してより幅広い視点で考えるようになったということかもしれない。

5. 今後への示唆

以上の結果から、英語科実習生の特徴として、「演繹的な学習より帰納的な学習重視」、「ペア、グループ活動重視」、「コミュニケーション志向」、「形式よりも内容重視」、「文化的側面の重視」、「生徒の誤りに対する寛容的態度」といったものがあることがわかった。また、現職英語教員に比べて、「文法を軽視していること」、「誤りの訂正に対して消極的であること」も特徴として挙げられた。しかしながら教育実習を終えて

もこれらの2点に対する態度に変化はみられなかった。その是非はともかく、この2点に関しては現職英語教員のbeliefsが実習を通して英語科実習生には影響を与えていないことを知っておく必要がある。

教育実習を終えて変化の見られた項目を見てみると、英語科実習生が自らの経験や教職課程での学習、世の通説等から身に付けたと思われるbeliefsが、実際に教壇に立つことでその違いに気づいて変化したものがほとんどであるようである。英語科実習生の「意識」改善を図る際は、教壇実習を通して自ら気づくような指導を行っていく必要があるだろう。

6. まとめと今後の課題

本研究は、教育実習の充実・改善への示唆を得るため、英語科実習生が持つbeliefsを明らかにすることを目的としておこなった。具体的には「①英語科実習生がどのようなbeliefsを持っているのか」、「②英語科実習生と現職英語教員との間にbeliefsにおいてどのような差異があるのか」、「③英語科実習生のbeliefsが教育実習を経てどのように変化するのか」、という3つのリサーチ・クエスチョンを明らかにすることを目的として行った。

先行研究を元に75の質問項目からなる質問紙を作成し、31名の英語科実習生と10名の現職英語教員から5件法で回答を得て分析を行った。まず①に関して、英語科実習生の特徴として、「演繹的な学習より帰納的な学習重視」、「ペア、グループ活動重視」、「コミュニケーション志向」、「形式よりも内容重視」、「文化的側面の重視」、「生徒の誤りに対する寛容的態度」といったものがあることがわかった。②に関しては英語科実習生と現職英語教員との間で比較を行い10の項目において有意な差が見られた。考察の結果、英語科実習生は現職英語教員に比べて、「文法を軽視していること」、「誤りの訂正に対して消極的であること」が特徴として挙げられた。③に関しては教育実習前・後の質問紙の回答を比較し、6つの項目で有意な差が見られた。考察の結果、これらの項目については教育実習で実際に授業を行うことで、現実とbeliefsとの差異に気づき、自分のbeliefsを修正させたと考えた。しかしながら現職英語教員との間で差異の見られた「文法指導」、「誤りの訂正」に関する項目での変化は見られなかった。実習生の指導に際し、この点を考慮して指導内容を考えていく必要があるだろう。

今回の調査対象はサンプル数も小さく、また1つの学校における限られたものであった。この結果のみで一般的な結論を導き出すのは早計であろう。今後更に大きな規模で同様の研究を行っていく必要がある。ま

た、今回の研究は質問紙による量的なものであった。英語科実習生がどのようなbeliefsを持っているのか、現職英語教員とどのような差異があるのか、教育実習を通して、どのようにbeliefsが変化したのかは、質問紙の回答を元にした推測にすぎない。今後、自由記述やインタビュー等の質的な調査を通して、更に詳細に明らかにしていく必要がある。

引用文献

中央教育審議会. (2006). 『今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)』
深澤清治, 檜葉みつ子, 赤松 猛, 伊賀泰恵, 石原義文,

井長 洋, 五井千穂, 笹原豊造, 壇 泉, 原田良三, 林 史. (2011). 「教育実習の改善に向けて—英語科実習生の授業意識に関する一考察 (1)」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第39号, 63-68.

藤沢伸介. (1985). 「教育実習生の教授行動の問題点にあらわれた初心者としての教師の特徴」『跡見学園女子大学紀要』第28号, 93-109.

Brown, A. V. (2009). Students' and Teachers' Perceptions of Effective Foreign Language Teaching: A Comparison of Ideals. *The Modern Language Journal*, 93, i, 46-60.

資料1 質問紙と回答の記述統計量

質問	実習生事前		実習生事後		現職教員	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
1 英語を流暢に話せるようになるには、文法の規則を理解する必要がある。	3.68	1.08	3.65	.91	4.50	.53
2 生徒が英語の基本的な文法規則をある程度理解すれば、自分で多くの文を創り出すことができる。	3.58	.89	3.45	1.18	3.50	1.08
3 生徒にとって、どう言うかより何を言うかに焦点を当てるのが大切である。	3.97	.89	3.83	.99	3.10	.32
4 英語の授業においては、文法構造をはっきりと繰り返し正確に示すことが重要である。	3.67	1.09	3.43	1.07	3.80	1.14
5 英語は、言語パタンについてたくさんのドリルや練習をすれば習得できる。	2.97	1.08	2.81	.91	3.30	.82
6 何を話そうとしているかが分かるならば、間違いをおかしても無視する方がよい。	2.97	.95	2.81	1.08	2.90	.99
7 読むことや書くことを始める前に、聞くことや話すことに関わる基礎的な技能を習得する必要がある。	3.35	1.08	3.48	.93	2.80	.79
8 生徒同士で、外国語による自由な会話を行なうと、誤りのある英語を使うので、互いの誤りを身につけてしまう。	2.68	1.19	2.71	1.10	1.80	.63
9 英語を学ぶには、英語が話されている国で学んだほうがよい。	3.71	.94	3.58	1.20	3.90	1.10
10 知能指数の高い生徒の方が、外国語の習得に成功する。	2.74	.96	3.00	1.03	3.00	1.15
11 言語は主として模倣 (つまり真似をして覚えること) によって学習される。	4.13	.67	3.87	.62	3.80	.42
12 英語を学ぶ日本人学習者は、日本語の影響を受けた間違いをおかす。	4.61	.50	4.39	.56	4.10	.88
13 外国語学習者は母語学習者 (つまり、母語を学ぶ子ども) と同じ誤りをおかす。	2.84	1.16	2.68	1.17	2.40	.84
14 ある文法規則よりも前に別の文法規則を習得する、というような習得の順序がある。	3.83	.87	3.90	.99	3.20	.79
15 英文を読むとき日本語に訳して初めて理解したと言える。	2.06	.89	2.26	.86	2.60	.52
16 作文は日本語で書いてから英語に訳させるべきである。	1.94	.81	2.16	.90	1.80	.42
17 大人も子どもも同じ習得過程をたどって外国語を習得する。	2.10	1.08	2.03	.91	2.20	.79
18 すべての生徒が同じ習得過程をたどって英語の文法を習得する。	1.52	.68	1.77	.96	2.10	1.29
19 すべての単語が聞き取れないとその話者の言いたいことは分からない。	1.52	.77	1.55	.77	1.30	.48
20 円滑なコミュニケーションには文法規則の知識があれば十分である。	1.71	.69	1.71	.69	1.40	.52
21 親はふつう子どもの文法的な間違いを訂正する。	3.03	.98	3.13	.99	2.90	.88
22 意味のわからない単語は文脈 (つまり、前後関係) から推測させたほうが辞書をひくよりも記憶に残りやすい。	3.61	.99	3.55	.93	3.40	.84
23 一定の時期を過ぎると外国語を習得しにくくなる年齢がある。	3.90	1.01	3.90	.79	3.50	1.27
24 教師は複雑な文法規則の前に簡単な文法規則を教えるべきである。	4.29	.82	4.19	.83	4.30	.67
25 すべての人間に生得的な言語習得能力がある。(生まれながらにして持っている能力のこと。)	4.35	.66	4.16	.90	4.30	.67
26 生徒の間違いはすべて訂正すべきである。	1.81	.87	1.84	.78	2.30	.82
27 はっきり規則を説明した方が、文法の習得が促進される。	3.19	.98	3.39	.88	3.80	1.03

28	学習者は、自分で文法を創造する。(その結果、ある文法規則は、教えられていないのに、身につけていることがある。)	3.94	.85	3.84	.69	3.40	.70
29	外国語学習の開始年齢が低ければ低いほど、それだけ成功の度合いも高い。	3.45	.85	3.32	.98	2.80	.63
30	英文を読む時は文章の構造(例、パラグラフ構造など)を考えて読ませるべきである。	3.94	.73	3.97	.91	4.20	.79
31	英語を読む時、音読したほうが理解が深まる。	3.87	1.18	3.87	.96	4.20	.92
32	外国語学習の過程は母語習得の過程と同じである。	2.16	.97	2.13	.96	2.00	.67
33	英文を読む時は読む前に内容を予測したほうが理解が深まる。	3.87	.88	3.97	.87	3.70	.95
34	英語の授業はすべて英語で行なわれるべきである。	2.55	.81	2.65	.88	2.50	.71
35	英語を聞く時は文字を見せるべきでない。	2.94	.93	2.55	.77	3.10	.88
36	外国語を身に付けるのは、大人より子どもの方が簡単である。	3.65	.84	3.39	.84	3.50	.71
37	外国語を身に付けるのに特別な才能を持っている人がある。	3.32	1.19	3.13	1.20	3.70	1.06
38	言語の中には、学習するのが簡単なものと難しいものがある。	4.48	.63	4.39	.67	3.90	.88
39	日本人は外国語を身に付けるのが下手だ。	2.74	1.18	2.90	.87	2.70	1.42
40	すばらしい発音で英語を話すことは大切である。	3.45	1.06	3.42	1.03	3.60	.84
41	英語を話すためには、英語を使う人々の文化を知る必要がある。	4.03	.80	3.71	.82	4.20	.63
42	正しく言えるようにならないうちに、何か英語で言うべきではない。	1.32	.48	1.55	.62	1.40	.52
43	一つの外国語を話せるようになってきている人は、もう一つの外国語を身に付けるのは簡単である。	2.94	.96	2.97	.98	3.20	.63
44	数学または科学が得意な人は、外国語を学ぶのは得意ではない。	1.55	.72	1.77	.76	1.50	.97
45	男性より女性の方が外国語を学ぶのがうまい。	2.23	1.04	2.17	.95	2.30	1.25
46	入門期の生徒が英語で間違いをしても許されるなら、その後正しく話せるようになるのは難しい。	2.13	.72	2.00	.73	1.90	.88
47	外国語学習で一番大切なことは、文法を身に付けることである。	2.06	.81	2.29	.78	2.30	1.06
48	外国語を学ぶことは、他の教科の勉強とは違う。	3.29	.94	3.55	.85	3.00	.82
49	2か国語以上の言語を話す人は頭が良い。	2.52	1.06	2.81	1.05	2.70	1.34
50	誰でも外国語が話せるようになる。	3.97	.66	4.06	.81	3.60	1.17
51	英語を聞いたり話したりするより、読んだり書いたりする方が簡単である。	2.94	1.03	2.90	.91	2.40	.84
52	英語は難しい言語である	3.06	.85	3.23	.99	3.50	.97
よい英語教師は							
53	IT技術(コンピューター、Eメール、その他電子機器)を積極的に使用する。	3.74	.96	3.74	.96	3.50	.71
54	グループ活動における評価を、成績の一部に入れる。	3.65	.71	3.74	.89	3.40	1.17
55	言語の指導と同じぐらい文化の指導にも時間をかける。	3.42	.96	3.16	.82	3.30	.67
56	教室外(インターネット、Eメール、クラブ、外部の活動等)での英語使用を生徒に求める。	3.03	1.05	3.16	1.10	3.10	1.10
57	生徒の発話における誤りをすぐに訂正しない。	3.93	.69	3.90	.92	2.90	.57
58	リスニングやリーディングの問題解答に英語でなく日本語で答えることを認める。	3.10	.70	3.26	.96	3.20	.63
59	生徒の発話上の誤りを、直接的でなく間接的に訂正する(間違っていると指摘するのではなく、その表現の正しい言い方をその場で返す、等)。	4.39	.62	4.19	.65	3.70	.67
60	言語そのものと同じぐらいの知識を、その言語を話す人の文化についても持っている。	4.13	.88	3.61	1.12	3.70	.82
61	生徒の文章(スピーキング、ライティング等)を文法的正確さで評価しない。	3.39	.88	3.52	.93	2.70	1.06
62	主に特定のタスク(ホテルの部屋の料金を調べる、等)を行わせることを通して言語を指導する。	4.00	.63	3.81	.79	3.20	.63
63	生徒に外国語の指示に体で反応させている(stand up, pick up your book, 等)。	3.90	.98	3.94	.77	3.50	.85
64	生徒の答えがなぜ間違っているのかを説明を加えながらすぐに訂正する。	2.94	1.00	2.87	.76	3.10	1.10
65	授業の初日から生徒に英語で話させる。	2.90	1.14	2.77	.96	3.11	.78
66	授業の活動においてグループやペアワークをあまり使わない。	2.00	.86	2.13	.76	1.90	.74
67	情報の交換を目的した活動より、明確な文法のポイントを練習する活動を主に使う。	2.45	.81	2.71	.86	2.30	.67
68	生徒にしっかりと準備をさせた上で英語を話させる。	3.10	1.01	3.45	.96	3.30	.67
69	ある文法項目を提示する際に、必ずその構造が実際の場面でどのように使われるかを例示する。	4.39	.62	4.39	.84	4.30	.48
70	文法的にも発音においてもネイティブのように英語を話す。	3.97	.75	3.68	1.05	3.80	.79
71	文法の指導において、規則の説明よりも具体例の提示を先に行う。	3.84	.90	4.03	.75	3.60	.52
72	言語や文化の指導においては、教科書よりも実物教材(音楽、写真、食べ物、服等)を主に使う。	3.81	.87	3.48	.93	3.50	.53
73	生徒が理解できるように、話す英語を簡単にしたり、変化させたりする。	4.65	.49	4.52	.57	4.60	.52
74	生徒が英語で他の生徒とうまくコミュニケーションする能力を、生徒の成績の一部として評価する	3.94	.89	3.94	.77	3.90	.57
75	授業で他の生徒から情報を引き出すような活動を用いる。	4.45	.68	4.48	.63	4.10	.57